



よしばんの栗田さん

大山グルメ食道プロジェクト飛躍編

～「大山町の楽しみ方 FUN×FAN DAISEN」発刊～

議会だより37号で特集した商工会の取材から2年。大山グルメ食道プロジェクトから、今回多くのメディアにもとり上げられる冊子が発刊されました。いまどき女子が改めて地域資源を掘り起こすという、こ

れまでにない視点が斬新で、デザインもとてもオシャレになっています。

そこで今回は、商工会事務局と参加事業者(女性)、仕掛け人の町担当職員(女性)にお話しを聞きました。



Mマートの眞島さん

特集

発刊のきっかけ

——話題となっている冊子「大山町の楽しみ方」ですが、発刊のきっかけを教えてください。

【矢木事務局長】グルメ食道プロジェクトも3年目となり、出来上がった商品をいかに売るかを考えていました。そこへ地方創生の事業として、行政から話をいただきました。今回は「観光・食・歩く」をテーマに、特に若い女性をターゲットにしました。

【田宮副会長】消費という点では男性より女性で、SNSなどの情報拡散にも期待できます。

【栗田さん】お店は5年前にオープンしましたが、コンセプトやこだわりなどから、情報誌などには載せない方針を貫いてきました。しかし、現場の担当者と話すなかで信頼関係が生まれ、今回初めて載せてもらうことにしました。

今後の展開は

——今後の展開も気になります。

【矢木事務局長】食の道を構築するには、関わっている事業者だけでは難しいと思っています。新たな取り組みなど、さらなる飛躍も考えています。

【田宮副会長】事業者の思いを聞いて、今後の展開に生かしたいです。それと、SNSの影響力は計り知れないので、うまく活用していきたいです。【栗田さん】男性の視点での冊子も面白いかもしれませんね。

——新商品の開発などについてお聞かせください。

【眞島さん】開発した「Mコロくん」やメンチカツを使い、大山の夏山開き祭にホットサンドを販売します。【栗田さん】常に考えてはいますが、イベントにも参加していきたいけど、商売を続けていくために断念することもあ

驚きの反響

——反響が気になるところですが。

【矢木事務局長】今井書店さんに協力してもらい、山陰両県の店頭に置かせてもらったりにしています。初版の1万部では足りず1万部増刷しました。

【栗田さん】100部は3日でなくなりまして、冊子を見



反響が大きい冊子

ります。

【眞島さん】仕事をしながらだと、なかなか商品開発にも集中はできないですね。

さらなる飛躍に向けて

——お互いに求めることなどがありますか。

【眞島さん】求めることじゃないですけど、声をかけてもらえば協力したいです。関わることアイデアももらっています。

【栗田さん】お店のコンセプトと合わずお断りしてしまいうこともありませんが、絶えず情報は教えてもらいたいです。関われる部分や、商売に生かせるアイデアなんかもあると思いますので。

【矢木事務局長】なにより自分のお店の経営を一番考えてもらい、無理はされないようお願いします。余裕のある範囲で参加してもらえればと思っています。——商売には時代に合った

て来店されたお客さんもあります。

【眞島さん】スーパーマーケットなので、ターゲットとする年齢層とは違いますが、100部はすぐになくなりまして。知らないお店や新たな魅力を知るきっかけになりました。

【栗田さん】たくさんフリーペーパーは置いてますが、かわいくてオシャレなものじゃなきゃ興味を示してもらえません。

——町外からお客さん呼び込めるよう、「コンビニ」などに置かせてもらうのは。

【矢木事務局長】いい考えです。

【眞島さん】米子に住む同級生にも、大山町に来たことがない人がいますよ。

【田宮副会長】おいしいお店がたくさんあるのになあ。



女性目線でかわいらしい内容

スピード感も求められると思いますが。

【栗田さん】全体で考えてると、なかなか前に進めなかったりもしますね。

【眞島さん】それぞれ扱ってるものが違うし、近いもので小グループを作ってもいいですよ。

【田宮副会長】まさに、そういう会が必要だと思っています。3町が合併して、今はアイデアや情報を交換する機会がなくなっていました。商工会として、そういう場を提供していきたいし、若い女性のアイデアに期待しています。

町担当職員の思い

消費行動や観光地の選定では、女性のほうが購買力・情報波及力があるとされています。そこで、女性に大山(町)の魅力を伝えたいと思い、思わず手に取りたくなる「かわいい」冊子で「食と観光」を追究してみました。大山を訪れてもらうきっかけになれば、と思います。



取材に応じる副会長(左)と事務局長

取材を終えて

今回の冊子を初めて目にした時、筆者も思わず手に取ってしまいました。今までにない何かを感じ、何が起きているのかを確かめたい、そんなことから今回の取材に発展した。女性ならではのアイデアなどもたくさん聞かせてもらった。新たな商品として、地域に活力と賑わいをもたらしてくれる日がきっと来る、そう期待せずにはいられなかった。